

序

昨年の地球惑星科学関連学会合同大会において、特別公開セッション「地学教育の昨日 今日 明日 - 地球惑星科学は理科 地学離れを救えるか? -」が、高校における地学履修者の長年に渡る減少問題を直接的な契機として、そして次世代に我々の研究成果を適正に伝えていくための方法を議論することを目的として開催されました。解決に当たらなければならない問題は、極めて広範なテーマを内包していますが、このセッションを通じて多くの研究者・教育者が共通の問題意識を有していることが改めて認識されました。あえて疎漏の危険を犯して要約すると、以下の4項目を上げることができます。

1. 「地学」は講義中心の暗記科目であるという印象を与えている。地球・惑星科学独自の方法論に則った「地学」の体系化が必要である。
2. 地学を専門とする教員が、小・中・高ともに不足している。専門教員の養成を図らなければならない。
3. 将来のカリキュラムの中での地学のありかたを議論する必要がある。
4. 入試制度における「地学」の現状と問題点を、具体的に把握する必要がある。

これらの問題を継続的に検討するために、コンビナーを世話人として「地学教育」委員会が合同大会運営機構の下に作られました。現在は、学会推薦の委員が16学会、41名、個人参加の委員が5名、うち世話人3名の計46名で活動しています。諸般の制約に関わらず、インターネット・メールによる意見交換を通じて、「地学」問題への持続的なアプローチが試みられています。本特別公開セッションの企画の成立過程においても、「地学教育」委員会MLでの議論が大きな影響を持ったことを付記させていただきます。

さて、2004年合同大会公開セッションのテーマは「新しい地学教育の試み - 地球惑星科学から 高校地学へ -」です。ここでは、上記の項目を踏まえて、地球惑星科学の研究者が高校「地学」に、どんな魅力的な成果を提供することができるのかを問います。言うならば「新しい人々」への地球惑星科学の贈り物です。研究成果を教材化することは、専門誌に投稿する論文を執筆するのとは違った難しさがあります。講演を聴いたり、本冊子を読まれた方の中には、その内容に教材としての不完全さを感じられることもあろうかと予想されます。実際、一つの教材が教材として定着するには、少なくとも10年間の試行錯誤が必要です。それに関わらず、多くの学会に所属する研究者・教育者によるこのような取り組みは、「地学」の現代化へと向かう潮流の一つの端緒と成り得ると信じています。聴講された皆様からの忌憚無いご意見を頂戴したいと思います。

昨年11月に企画を発表すると同時に、関係各学会に向けて講演募集を行いました。上述のように、困難な作業が予想されるにも関わらず、7学会からの応募がありました。未筆ですが、応募していただいた学会関係者の皆様、ならびに今回は応募を見送られましたが、応募を検討していただいた学会関係者の皆様にコンビナーとして感謝申し上げます。昨年同様、熱のこもった講演と活発な議論によって、今日の集まりが有意義なものになることをコンビナー一同、心から願っています。

コンビナー 中井 仁 (大阪府立茨木高等学校, 文責)
根本泰雄 (大阪市立大学大学院理学研究科)
大村善治 (京都大学生存圏研究所)